

「クリエイターの話 ～私のイメージの源泉」

スペースデザイン部会員 かがや たけし 加賀谷 健至

『身の回りをみつめる』

1990 年代、北欧に滞在した期間がありました。おもな活動拠点はフィンランドの主都、ヘルシンキ。滞在の目的はフィンランドを中心とした北欧の造形やデザインを学ぶことでした。幸いにもヘルシンキ市内の芸術デザイン大学で研究する環境に籍を置く事ができ、多くの美術作家やフィンランドデザインのクリエイターと交流する機会を持つ事が出来ました。

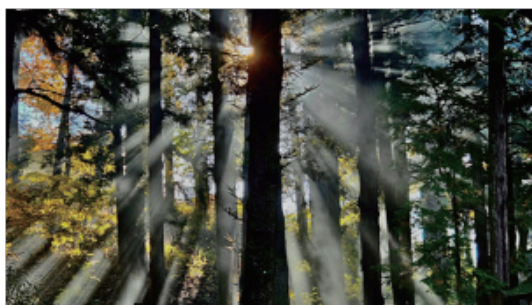
私は、北海道生まれですが、北欧、特にフィンランドの自然や生活環境はとても類似する点が多く、気候や衣食住においてはなに不自由することなく、日常生活や創作活動を送ることができました。そのような環境の中、私が出会った多くのクリエイターの作品は、大自然に囲まれた生活のなかで生まれたものが多くみられ、具象や抽象を問わないものでした。彼らから創出された造形は、特別なものではなく、身近な自然や生活空間のなかで、自由に創出されたフォルムのように感じました。そこでは、北欧の不要な要素をそぎ落とし、本質的な美しさや機能性を追求したシンプルなデザイン追求した作品が多くみられ、現在の私の作品に深い影響を与えたものばかりでした。

近年、私はこのシンプルな造形表現を目指し、作品を制作してきました。身近な生活環境のなか、五感（視覚、嗅覚、聴覚、味覚、触覚）等で感じた感覚を自分の「かたち」でシンプルに表現すること、それが現在の私が作品と通し表現するうえで大切な部分となっています。作品のアイデアの種は身の回りに無数に存在しています。肝心なのは、それに気づく感覚を身につけることだと思います。

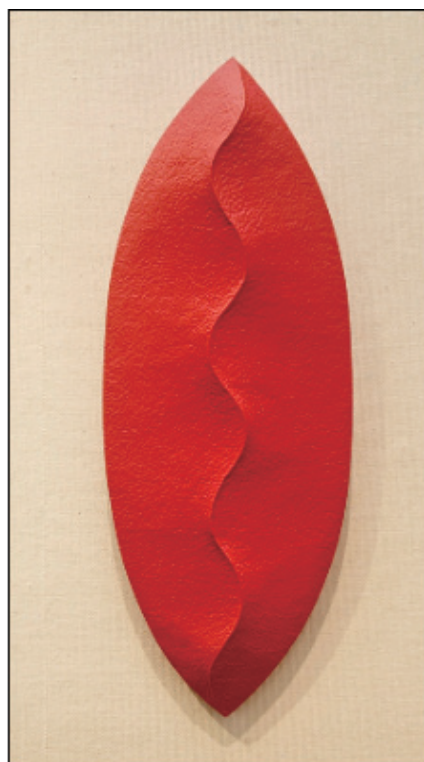
ここでは、私が発表した作品を四つのテーマ
＜ながれる＞＜ひろがる＞＜割裂＞＜波紋＞について、ご紹介したいと思います。

＜ながれる＞

○液体や気体が流れること。また、その状態や、そのものなど

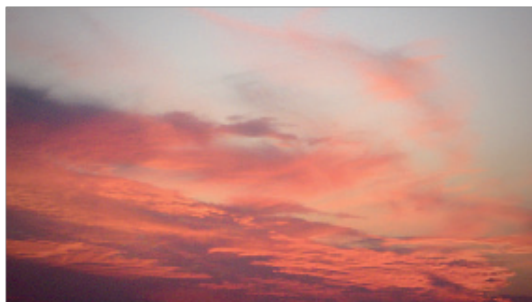


あるとき、早朝に山深い神社に伺いました。
その折に、朝霧が空に向かって昇っていく光景が
とても清々しく心に残りました。
いつか自分の「かたち」で表現したい、と思いながら
最近やっと自分が思うような作品に少し近づきました。



「時の刻みかた～佇む～」

2025 年 さいとうギャラリー



「時の刻みかた～そらのかたち～」

第 88 回新制作展 (200×350×10cm)



晩秋の夕焼け空を見上げた時、夕焼け雲が空一面が朱鷺色になった光景が心に焼き付いています。
早く流れる雲、ゆったり流れる雲、さまざまな動きをする雲の動きを想起しながら制作した作品です。

<ひろがる>

○空間、面積、幅が大きくなる様子

○花火や光が中心から広がっていく様子、また植物の花がつぼみから広がっていく様子など



「時の刻みかた～光のかたち～」

第 88 回新制作展 (100×350×5cm)

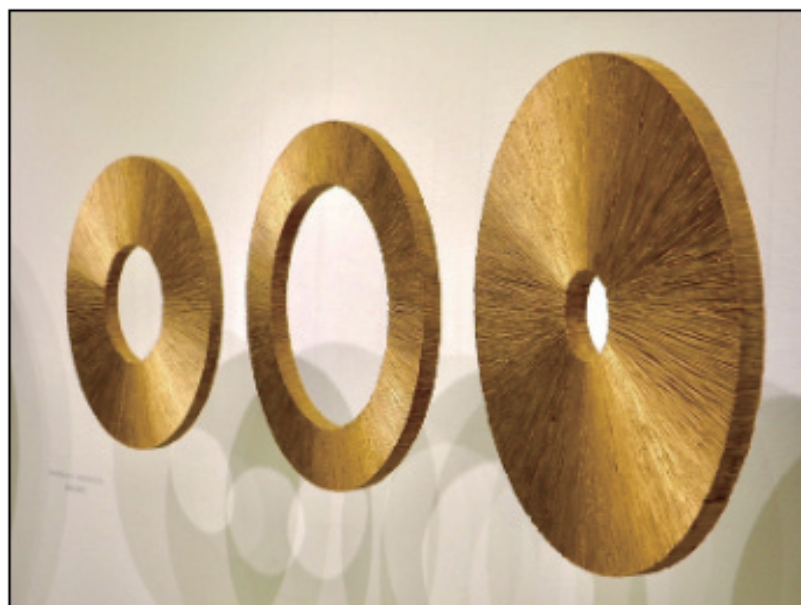


新潟県、長岡市の花火大会を観に行く機会がありました。学生時代に山下清氏の図録で観た「長岡の花火」はどのような光景なのか憧れがありました。夕方前から信濃川の堤防に腰掛けて仲間とお酒を呑みながら、ちょうど良い加減にお酒が身体に沁みてきた頃、その時を迎えました。長いサイレンがなった後、正三尺玉が打ち上がった瞬間、頭上一面に広がる光線の光景はいまだに脳裏から離れません。そんな記憶をもとに制作した作品です。



「時の刻みかた～華のかたち～」

第 85 回新制作展 (200×350×10cm)



草花を観察することが好きです。小さい蕾から大輪に広がっていく花卉の様子はとても美しく、生命観あふれる力強いものです。そのような美しさ、力強さを表現しました。

＜割裂＞ ○割れて複数の裂けることなど



「時の刻みかた～内と外の関係～」

第 77 回新制作展 (110×250×10cm)

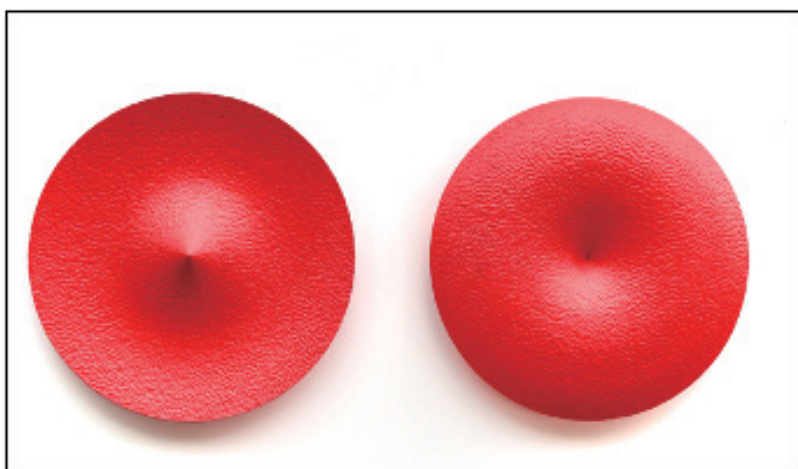


北海道ではアンモナイトなどの化石が取れる地層があります。学生時代、世界的な化石の採取地が身近にありました。ノジュールという地層中に含まれる丸みを帯びた岩石の塊をハンマーで割ると中からアンモナイトなどの化石が出てきます。今では、なかなか山に入る機会はありませんが、当時は、とても夢中になった思い出があります。この作品は一つの塊から二つに分かれとときの面白さをイメージしたもの。まさしくその時の記憶から生まれた作品です。



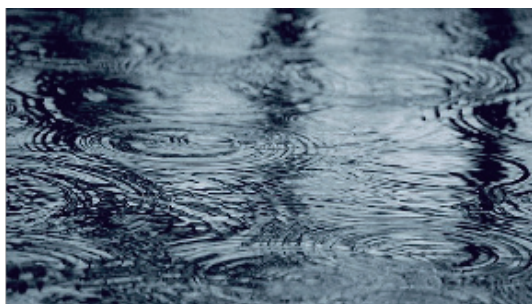
「時の刻みかた～外と内の関係～」

第 86 回新制作展 (90×300×10cm)



家庭菜園で採れたトマトを調理している時に、トマトのとんがった先とヘタを取った部分が、二面合わせると、ちょうど収まることに気づき、ちょっとした遊び心で作品にしてみました。

＜波紋＞ ○水面に物などが落ちた時にいく重にも輪を描いて広がる模様など



「時の刻みかた～水の記憶～」

2015 年 JR タワーアートプラネッツ 2015

越境する「手わざ」たち

～アートと工芸のはざまから



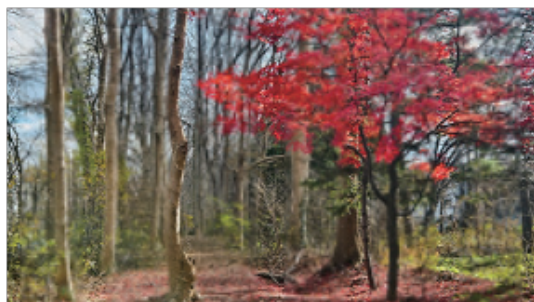
「しずくの器」

(150×400×15cm) 札幌

2013 年 クラフトで乾杯！ 審査員特別賞（小泉誠）



温泉が好きです。ある入浴時に天井から水滴が水面に落ちる様子を長時間、「ボー」と眺めていました。何度も見ているうちに、このような幾重にも輪を描いて広がる「かたち」が見えてきました。この水紋のシリーズはクラフト作品「しずくの器」にもよく使う「かたち」にもなっています。



「時の刻みかた～音のかたち～」

第 84 回新制作展 (40×300×6cm)

私は野山を散策することが好きです。特に、晩秋の時期は落ち葉が積み重なって落ちており、その上を歩くと、落ち葉が「カシャカシャ」と音を立てて、とても楽しいです。森を歩くと、頭上からは風の音、鳥の鳴き声、足元は落ち葉や土を踏み鳴らす音など、いろいろ楽しい音がいっぱいです。

私はこのさまざまな音が共鳴する様子を「かたち」に出来ないかと考え、水紋シリーズの「形」を用いました。

ちなみに今年はヒグマが怖くて山には入っていませんが…



北海道／札幌市生まれ

- 1990 新制作展（東京都立美術館）
加賀谷 健至展（札幌時計台ギャラリー）
- 1991 91 '新潟の美術展（新潟市立美術館）
- 1992 第3回現代日本木刻フェスティバル
（関市文化センター／岐阜）
- 1993 第11回朝日現代クラフト展
（うめだ阪急百貨店など／大阪・東京）
- 1994 第7回全国ウッドクラフト公募展（兵庫）
- 1995 北海道本庁舎（地下連絡路）
「風の記憶」3点作品設置（札幌）
- 1996 札幌芸術の森クラフト全国公募展 96
（札幌芸術の森美術館）
- 1997 ヘルシンキ芸術デザイン大学 客員研究員
（現 アアルト大学／フィンランド）
- 1998 冬の企画展 1998
（BAU ギャラリー／フィンランド）
- 1999 木と生活文化展 99
（ホテル京セラ／鹿児島）
- 2000 新制作展 新作家賞受賞（13年も受賞）
（東京都立美術館）
南風の生活文化展 2000（サンあもり／鹿児島）
- 2001 新制作協会受賞作家展（画廊るたん／東京）
- 2002 新制作協会 会員推挙
ビアマグランカイ4（札幌芸術の森美術館）
第2回全国 木のクラフトコンペ
（小田原アリーナ／神奈川）
- 2003 加賀谷健至展（画廊るたん／東京）
酒の器・展（金津・創作の森美術館／福井）
- 2004 空間アート展
（ギャラリーユニグラバス銀座館／東京）

- 2006 加賀谷健至展（ギャラリー・オカベ／東京）
- 2007 空間の彩展（画廊るたん／東京）
- 2009 加賀谷健至展（さいとうギャラリー／札幌）
- 2010 ビアマグランカイ8／アウラ野々村賞受賞
（札幌芸術の森美術館）
津別ウッドクラフト展 2010／最優秀賞
（つべつ木材工芸館／北海道）
- 2011 札幌芸術の森 開園 25 周年記念展
「北海道クラフト展 2011」
（札幌芸術の森美術館）
- 2013 北海道の木の椅子 100 人の木の椅子展
（札幌芸術の森美術館）
スペースキューブ展／新制作協会 SD 部
（建築会館ギャラリー／東京）
- 2014 クラフトで乾杯！／審査員特別賞（小泉誠選）
（札幌芸術の森美術館）
- 2015 茶～今日のしつらえ～
（札幌芸術の森美術館）
加賀谷健至展
（ギャラリー日の丘／北斗市／北海道）
- 2016 0歳からのげいじゅつのもり
（札幌芸術の森美術館）
- 2017 新制作 北海道ゆかりの作家たち展
（本郷新記念札幌彫刻美術館）
SHELVESII 小オブジェ展
（オリエ アート・ギャラリー／東京）
- 2018 札幌 JR タワー アート・プラネッツ 2018 記念展
（プラニスホール／札幌）
- 2020 ちょっと小さいスペースデザイン展
（建築会館ギャラリー／東京）
- その他 企画展 個展 グループ展 等

<公共空間における作品設置およびコレクション>

北海道本庁舎（道庁）地下連絡路／ヘルシンキ芸術デザイン大学／佐賀県立美術館／
札幌芸術の森美術館／津別町ホテル／マンション 等

SD 通信 Vol. 67『クリエイターの話 ～私のイメージの源泉』加賀谷 健至 編は如何でしたか。
丹念な手作業による木素材の表情がとても魅力的な加賀谷さんの作品ですが、今回の特集ではその造形イメージの基になるモチーフをご提示されながら語っていただきました。木という自然素材を愛してやまない加賀谷さんの作品の根底には、北欧での体験から身につけた感性、そして自然の風景や何気ない日常に対する愛情や優しい眼差しがあることが理解できました。シンプル且つインパクトのある造形表現、次の展開が更に楽しみです。
皆さんの感想なども是非お聞かせください。→ shinseisaku.sd1969@gmail.com

◆加賀谷 健至さんの情報は新制作協会ホームページにも掲載されています。

→ <https://www.shinseisaku.net/wp/archives/5355>

◆SD 通信 Vol.8「私を創ってくれた3つの作品」加賀谷 健至 編はこちらでご覧いただけます。

→ https://www.shinseisaku.net/wp-content/uploads/2023/06/SDcommVol.08_The-three-works.pdf

◆SD 通信のこれまでのバックナンバーは協会ホームページに掲載されています。

過去に配信したシリーズ「私を創ってくれた3つの作品」のバックナンバー（Vol.1～35）もご覧いただけます。

→ <https://www.shinseisaku.net/wp/archives/26661>

◆88 回展の会場の様子が見れる <バーチャル パノラマツアー>

下記のアドレスからアクセスください。

→ <https://r93840544.theta360.biz/t/e3b09dbc-9430-11f0-b697-060182f6995f-1>